

## 私の卒業論文

\* 表題はすべて卒業論文の題目  
で統一した。

### △初期万葉と人麻呂▽

第一回卒業 天野 令子

卒論の要約をというお話だが卒論の事を思い出すたびに当時の未熟な思考がすぐ頭に浮かんで来て、たまらない恥ずかしさにとられないわけにはいかない。卒論を書く頃の私は何によらず全て一定の形式や枠にきっかりはめられたようなもの、あるいは完成された姿のものには魅力を感じずる事がなく、反対に全く粗野で、未完成の荒々しさを持つもの、一つの型となる以前の一種のカタマリにすぎないようなものを愛していた。したがって卒論に上代の万葉集、特に初期万葉の世界に深くひかれたのもそういう私自身の内面における志向性と無関係ではなかったと思う。万葉の初期は時代の文学的衝動が何とか「和歌」という一定のジャンルを確立しようとして渾身の力を傾けながらも未だ完全な定着をみない時期であると言われている。「高明、清澄」と評される初期万葉の歌風であるが、それらの歌々を誕生させた背景や底流には新しい表現を、文学を生み出す

そうとして葛藤する、時代と人間達による混沌として渦巻き流れる、文学的衝動やエネルギーがあったと思われる。私の興味はより根源的なものへ向かっていった。最初に文学を生みだした衝動やエネルギーの実体は何だったのだろうかとか、あるいは文学と文学以前とを分けるものは何であろうかなどという思いにとらわれ、万葉を通して文学が文学として確立する時点を自分なりに考えてみたいという大それた野心を持って卒論に着手したように思う。表題は『初期万葉と柿本人麻呂』として中味を三章に分けた。一章では表題と同題とし、二章では「初期万葉と挽歌」三章では「柿本人麻呂の混沌」という具合にしたが、今ながめてみると思わず赤面するような壮大なテーマばかりであった。ごく簡単にまとめてみると一章では初期万葉作家達の特殊な詞人的系譜を人麻呂との関連でとらえようとしてみた。歌が個人の自由な発想と立場からはまだ生まれにくい時期、そこに生まれた歌は必ず何らの前代からの立場や伝統を継承し、その上で初めて万葉作家たる新たな創造性や自主性を主張しているはずである。結論を言えば従来、歌謡から初期万葉を通して人麻呂へ至る詞人的系譜が一線線上にとらえられていたのに対して、人麻呂以前の歌人的系譜にはいくつかの流れがあり、人麻呂はどういう系譜を強く受けついでいるかを考えてみた。実際のところ論理的にうまく系譜がひけず大いに苦しんだものである。二章ではやや視点を変え歌謡から初期の挽歌を通して作歌する側からだけでなく、作歌をうけとめる享受層との関連からも抒情性の発展の問題を考えてみようとした。どういう作品をどういう階層がどういう反応でうけとめるか、という問題は当時の文学意識を知る上で重要なポイントとして、興味ある視点であった。特に作品を享受する事自体

にも大きな文学活動としての意味があったこの時代、歌謡と初期の挽歌の詠み手、受け手双方の意識の関連からしだいに抒情性が進展してゆく様子を考へてみた。三章のテーマは私には重すぎて自分なりの結論をひき出す事が出来なかつたが、当時の私として避けられない問題であるような気がして考へてみたのである。

卒業論文を今反省してみると、出来ればもっと自由に書いてみたかつたような気がする。もっと評論に近いような発想で思ひきつた事を書いてよかつたのではなかつたかなどと思われてならない。

## △動詞の動作態と助動詞「つ」「ぬ」▽

第一回卒業 古市 久美子

(旧姓 木下)

現在、完了の助動詞とされている「つ」と「ぬ」という助動詞が、どういう意味をあらわすものであり、どういう変化をするものであるかということについては、これまで種々の説がでてゐる。また、助動詞「つ」「ぬ」の意味上の相違については、従来いろいろと論議されてきたが、まだ明確になつていないようである。それらの諸説を大別してみると次のようになる。

(一) 「つ」は他動詞につき、「ぬ」は自動詞につく

(二) 「つ」は意志的・作爲的・動作的・存続的な動詞につき、

「ぬ」は無作爲的・自然発生的動詞につく

(三) 「ぬ」は動作の完了を言い、「つ」は完了と共にその結果の観念を伴うものである

(四) 「ぬ」は状態の発生を、「つ」は動作の完了を示す

そこで、この四つの説をそれぞれの立場で用例(源氏物語に見える助動詞「つ」「ぬ」の用例)にあつたつて考察検討してみた。

この両者(一)(二)は「つ」「ぬ」のつく動詞のちがいを問題にする。(三)はそれ自身の意味のちがいを問題にする。(四)は密接な関係にあるもので、どちらも等閑視することはできないが、ただ「つ」「ぬ」が接続するのは品詞としての動詞ではなく、述語としての動詞であるということを確認しておいて、この問題にあたらなければならぬということがわかつた。即ち、本来「つ」「ぬ」を伴う動詞があるのではなく、文脈全体の中にその動詞が有しているその場合場合の意味内容に依じて「つ」がついたり、「ぬ」がついたりするものだろうと考へられる。

これは橋本研一先生の御説の如く、動詞の中には一語で「つ」を伴つて過去から現在に至る継続動作の完了を表わす用法と、「ぬ」を伴つて現在から未来にわたる存続状態の発生を示す用法とをあわせ兼ねるものがあり、一語の動詞ではあつても、意味の把握の仕方によつて内容が一樣ではないものがあるのである。

そこで一般的には「つ」が一時的・瞬間的な動作・作用を意味する表現につづくのに対して、「ぬ」は時間的には多く継続的推移を意味する事柄の表現につづく場合が多い。また人間の運命的な事実を述べる場合、時間の経過や季節の推移、天体の運行など客観界における必然的な事実の推移を述べるような場合には「ぬ」が多く用いられて、「つ」は用いられないようである。しかし、これはあくまで結果的に言えることであつて、やはり「つ」「ぬ」の区別を考へる場合には、「つ」「ぬ」それ自体の意味を前後の文脈の意味的なつながりの上において把握していかなければならないのである。